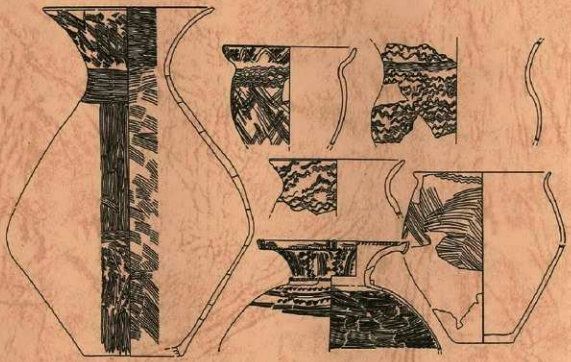
坂城町埋蔵文化財調査報告書第27集

込山遺跡群（こみやまいせきぐん）

込山C遺跡Ⅱ・Ⅲ

—長野県埴科郡坂城町鉄の展示館・中心市街地コミュニティセンター発掘調査報告書—

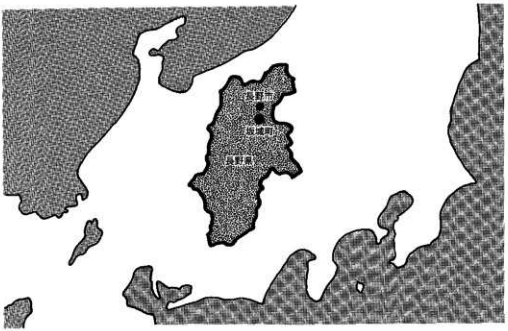


2006.3

坂城町
坂城町教育委員会

込山遺跡群

込山C遺跡Ⅱ・Ⅲ



坂 城 町

坂 城 町 教 育 委 員 会

序

坂城町教育委員会教育長　柳澤　哲

本書は、坂城町の「鉄の展示館」と、それに隣接する「中心市街地コミュニティセンター」の建設にともなう二か所・二回分の発掘調査報告書であります。

坂城町には多くの遺跡が存在しますが、本書に掲載した発掘調査報告の対象地はいずれも込山遺跡群と名付けられたところで、縄文時代から平安時代の集落址に加え、平安時代頃の豪族の私寺であったと考えられる込山廃寺が存在する地域です。また、近世に至っては、当時の幹線道路・北国街道がこの遺跡群内を通過しており、遺跡、史跡が集中する重要な場所であります。

とくに今回の二か所は、込山遺跡群のなかでもその中央付近に位置し、これまでの発掘調査から縄文時代前期や古代の住居址、さらに込山廃寺にかかわる遺構がみつかっている込山C遺跡に属します。

それだけに発掘の結果が期待されたわけですが、残念ながら以前に建設されていた建物によって遺跡が壊されており、完全な様子まではわかりませんでした。しかし、それでも弥生時代から古代の集落の様子がわかり、さらにみつかった土器のなかには弥生時代に東海地方からもちこまれたと考えられるものもあり、多くの成果を得ることができました。

これも、偏に大変暑いなか、黙々と作業にあたっていただいた方々はじめ、調査目的をご理解しご協力をいただきました関係機関、地域の皆様のおかげと心から御礼申し上げる次第です。

本書が今後の研究の一助となれば、幸いであります。

例　言

1　本書は長野県埴科郡坂城町における鉄の展示館建設に伴う込山C遺跡Ⅱ、中心市街地コミュニティセンター建設に伴う込山C遺跡Ⅲの報告書の合冊本である。

2　発掘調査は坂城町商工課より委託を受け、坂城町教育委員会が実施した。

3　発掘調査所在地及び面積

込山C遺跡Ⅱ	長野県埴科郡坂城町大字坂城6313-2	362.81㎡
込山C遺跡Ⅲ	長野県埴科郡坂城町大字坂城6313-5他	288.60㎡

4　調査期間

込山C遺跡Ⅱ	（現地調査）	平成13年5月25日～6月22日
	（整理調査）	平成17年4月1日～平成18年3月20日
込山C遺跡Ⅲ	（現地調査）	平成16年7月26日～8月12日
	（整理調査）	平成17年4月1日～平成18年3月20日

5　本書の執筆・編集は助川が行なった。

6　込山C遺跡Ⅲの地理的環境及び歴史的環境、基本層序については、込山C遺跡Ⅱと重複するので割愛した。

7　本書の作成にあたり、助川のほか天田、田中、荻野が主な作業を行った。

8　遺物の写真撮影については㈱オオカワプロセスが撮影したものを使用した。

9　本書に掲載した航空写真は㈱みすず綜合コンサルタントが撮影したものである。

10　本書及び調査に関する資料は、坂城町教育委員会の責任下において保管されている。

11　本調査や本書作成にあたって、下記の方や機関からご配意を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略、五十音順）

青木　男、青木正洋、赤松　茂、飯島哲也、上原　学、小野紀男、臼田武正、尾見智志、風間栄一、川上　元、児玉卓文、小林真寿、小山岳夫、櫻井秀雄、佐藤信之、坂井美嗣、新谷和孝、須藤隆司、堤　隆、寺島孝典、冨沢一明、羽毛田　卓也、林　幸彦、福島邦男、三石宗一、翠川泰弘、宮下健司、矢口忠良、矢島宏雄、和根崎　剛、㈱更埴地域シルバー人材センター

凡　例

1　遺構の略号は、下記のとおりである。

H　→　竪穴住居址　　D　→　土坑址　　F　→　掘立柱建物址　　P　→　ピット

2　遺構名は時代別ではなく、発掘調査時においての命名順である。

3　挿図の縮尺は、下記を基本としたが、挿図の中に異なるものもあり、各図ごとに縮尺を明記した。

竪穴住居址・掘立柱建物址・土坑址・溝状遺構　→　1／80

遺構配置図　→　1／300　土器→1／4

4　挿図中におけるスクリーントーンは下記を示す。

1）遺構

遺構構築土

2）遺物

弥生赤色塗彩　　釉薬　　石器敲滅部

5　込山遺跡Ⅲの遺構名については、込山遺跡Ⅱからの通し番号とした。

6　遺物の挿図中での表記は、第1図1は1－1とした。

7　土層の色調は『新版　標準土色帖』の表記に基づいて記載した。

8　土器の観察表は本文の後に掲載し、法量は口径・底径・器高の順に記載し、―は不明、（）は残存値、〈〉は推定地、（）がない場合は、完存値を示している。単位はcmである。

目　次

序・例言・凡例

第Ⅰ章　込山Ｃ遺跡Ⅱ …… 1

第１節　発掘調査の経緯 …… 1
1　発掘調査における動機と経緯 …… 1
2　調査の構成 …… 2
3　調査日誌 …… 2
第２節　遺跡の立地と環境 …… 3
1　地理的環境 …… 3
2　歴史的環境 …… 3
第３節　調査の概要 …… 8
1　調査の方法 …… 8
2　基本層序 …… 9
3　検出された遺構・遺物 …… 9
第４節　調査の結果 …… 11
1　竪穴住居址 …… 11
2　土坑址 …… 16
3　ピット及びグリッド出土土器 …… 17
4　調査区出土石器 …… 17
写真図版

第Ⅱ章　込山Ｃ遺跡Ⅲ …… 25

第１節　発掘調査の経緯 …… 25
1　発掘調査における動機と経緯 …… 25
2　調査の構成 …… 26
3　調査日誌 …… 26
第２節　調査の概要 …… 27
1　調査の方法 …… 27
第３節　調査の結果 …… 29
1　竪穴住居址 …… 29
2　土坑址 …… 30
3　その他の遺物 …… 32
写真図版

第Ⅲ章　総　括 …… 36

あとがき …… 38
報告書抄録 …… 39

第Ⅰ章　込山C遺跡Ⅱ

第1節　発掘調査の経緯

1　発掘調査における動機と経緯

込山遺跡群は坂城町坂城に所在し、標高397.4～463.4mを測る日名沢川によって形成された扇状地の扇央部、千曲川の段丘上に位置する。平成元年度に作成された『坂城町遺跡分布図』によると、縄文～平安時代の複合遺跡とされている。本遺跡群は広範囲に広がっているため、込山A・B・C・D・E遺跡と細分化され、込山遺跡群の中には、古代寺院であった込山廃寺も所在している。本遺跡周辺では、昭和36年に縄文中期の住居址の検出、坂城駅の拡張工事によって、込山D遺跡（註1）から縄文時代晩期の遮光器土偶が出土している。平成11年度町営住宅建設による込山B遺跡の調査では弥生時代中期と平安時代の住居址が検出されている。平成12年度実施の坂城保育園建設事業によって、縄文時代早期の住居址、中期の住居址、平安時代の住居址などが検出されており、込山廃寺に程近い調査地点であることから、寺院に関連する布目瓦が出土した。これらのことから、込山遺跡群は寺院関係の遺跡であると共に縄文時代中期～晩期や弥生時代中期～平安時代の遺跡であることが判明している。

今回、鉄の展示館建設事業（当時は産業展示館）が計画され、込山C遺跡の破壊が余儀なくされることになり、坂城町商工課と坂城町教育委員会生涯学習課による保護協議の結果、遺跡の状況を確認するための試掘調査が行われた。試掘調査の結果では対象地にかつて工場が建設されていた関係から、多くを攪乱されてはいたがそのような状況下でも遺構・遺物の検出が見られ、その結果を受け再度、保護協議が実施された。その結果記録保存を前提とした発掘調査を実施する事となった。

註

（註1）『長野県史』では込山E遺跡出土と記載されているが、坂城町教育委員会では出土地点を考慮した結果、込山D遺跡として扱うこととした。

第1図　込山C遺跡Ⅱ　位置図（1：25000）

2　調査の構成

発掘調査の体制

調査指導者　塩入　秀敏（上田女子短期大学教授、日本考古学協会会員）
現場担当者　齋藤　達也（坂城町教育委員会学芸員）
整理担当者　助川　朋広（坂城町教育委員会学芸員）
協　力　者　朝倉　妙子、天田　澄子、坂巻　ケン子、田中　浩江、千野　美樹、塚田　さゆり、
萩野　れい子（以上、町臨時職員）
池田　てる子、池田　初栄、鈴木　瑞穂、滝沢　袈裟夫、竹鼻　茂、竹鼻　武、
塚田　智子、塚田　義勝、増田　勇、柳沢　勲、山田　武敏
（以上、㈱更埴地域シルバー人材センター派遣）

事務局の構成

教　育　長　大橋　幸文（～平成17年6月30日）
柳澤　哲（平成17年7月1日～）
教育次長　宮原　健一（～平成13年3月31日、生涯学習課長兼務）
生涯学習課長　塚田　好一（平成14年4月1日～）
文化財係長　池田　弥惣（～平成13年3月31日）
坂口　ふみ江（平成14年4月1日～平成15年3月31日）
助川　朋広（平成15年4月1日～）
文　化　財　係　宮入　正代（平成17年4月1日～）
助川　朋広（～平成15年3月31日）
齋藤　達也（～平成16年度）
朝倉　妙子、天田　澄子、坂巻　ケン子、田中　浩江、千野　美樹、塚田　さゆり、
萩野　れい子（以上、臨時職員）

3　調査日誌

平成13年度発掘調査実施。

5月25日　本日よりバックホーによる表土剥ぎを実施する。
5月26日　機材等搬入を行う。
5月31日　本日表土剥ぎを終了する。
6月1日　本日発掘調査の開始式を行う。引き続き、遺構の検出作業を実施。
6月6日　基準点測量開始。遺構配置図作成開始。
6月7日　Y1・2号住居址、H1号住居址調査を行う。その後随時遺構の調査を行う。
6月20日　本日発掘調査（現地調査）終了式の実施。航空写真撮影を行う。
6月22日　本日を持って発掘調査（現地調査）を終了する。

平成17年度中整理作業を実施し、報告書刊行。

第2節　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

坂城町は北信地方と東信地方の接触点にあたり、善光寺平を構成する更埴地方の最南端に位置している。坂城町は、県の東部に源流を発し、町の中央部を貫流する千曲川によって、右岸地域と左岸地域とに分断されている。この千曲川は坂城広谷（坂城盆地）と呼ばれる沖積地を形成し、また、この千曲川に流れ込むいくつかの小河川がつくりだした扇状地によって形づくられている複合扇状地が発達している点に特徴がある。町の北から東にかけては五里ヶ峰・大峰山・虚空蔵山をはじめとする標高1100～1300m前後の山々が屏風のように連なり、千曲市・上田市との市町村界を形成し、西は大林山、三ッ頭山などの標高1000m前後の山々が連続し、千曲市・上田市との市町村界となっている。北は千曲川右岸の横吹きと左岸の自在山による岩壁がネックとなり、南では千曲川右岸の岩鼻と左岸の半過の岩鼻が狭隘な地形を形成し、上田盆地と隔てられている。このような地形から、古来よりこの地域は千曲川流域の要衝の地として注目されてきた。

この地域は南北に開けた小盆地状をなし、季節風の影響を受けやすいため、夏季は南風、冬季は北風が強い。また、盆地状になっていることから寒暖の差が大きい。降水量は少なく、日本で最も雨量の少ない地域の一つとされている。現在では、この気候も関連し、工業が主要な産業であることに加え、農業では、りんご・バラ・ぶどうの栽培が盛んである。

込山C遺跡は、坂城町の右岸の北寄りに位置する坂城地区の市街地に所在し、日名沢川によって形成された扇状地の扇央部付近に位置し、近世の官道であった北国街道によって形成された集落址が存在している周辺を指している。

2　歴史的環境

千曲川や小河川によって形成された自然堤防や扇状地には、いくつもの遺跡が存在し、その遺跡の性格も多種多様である。ここでは、坂城町の各時期について代表的な遺跡を挙げながら、町の歴史的環境について触れておきたい。（括弧内の数字は3、4ページの坂城町遺跡分布図における遺跡番号を示す。）

坂城町で最古の遺物は、約14,000～15,000年前の後期旧石器時代の上ヶ屋型彫刻器とされる石器である。この石器は南条地区の保地遺跡（3－1）より採集されたものであるが、本出土品以外には後期旧石器時代の遺物は確認されていないので、実際のところ詳細は不明である。

縄文時代の遺跡では正直なところ発掘調査遺跡数が少なく、詳細に欠けるところが多いが、『坂城町誌』では早期押型文系の土器や前期諸磯系の土器が坂城地区の和平A遺跡や平沢遺跡での採集遺物が掲載されている。また、平成12年度に発掘調査が実施された坂城地区の込山C遺跡（30－3）からも押型文系の土器片が実量出土しているが、これらは現在整理中である。この他に縄文時代前期・中期の土器も出土している。後期・晩期では、学史的にも有名な保地遺跡が挙げられる。保地遺跡は昭和40年度と平成11年度に発掘調査が実施されている。前者は縄文時代後期後半から晩期後半までの土器・石器群と、後期後半に属するとされる特殊儀礼的遺構の出土が『考古学雑誌』に報告されている（関　1966）。後者については、縄文時代晩期に位置づけられると考えられる再葬墓が検出されており、中でも約19個体分の人骨が埋葬された2号墓址が注目され、再葬のあり方と食性についても課題を残している。その他、坂城地区の込山D遺跡（30－4）から昭和初期に採集された遮光器土偶の頭部がある。

弥生時代では、中期以前の調査例が少ないため状況は不明であるが、込山B遺跡や込山D遺跡（平成17年

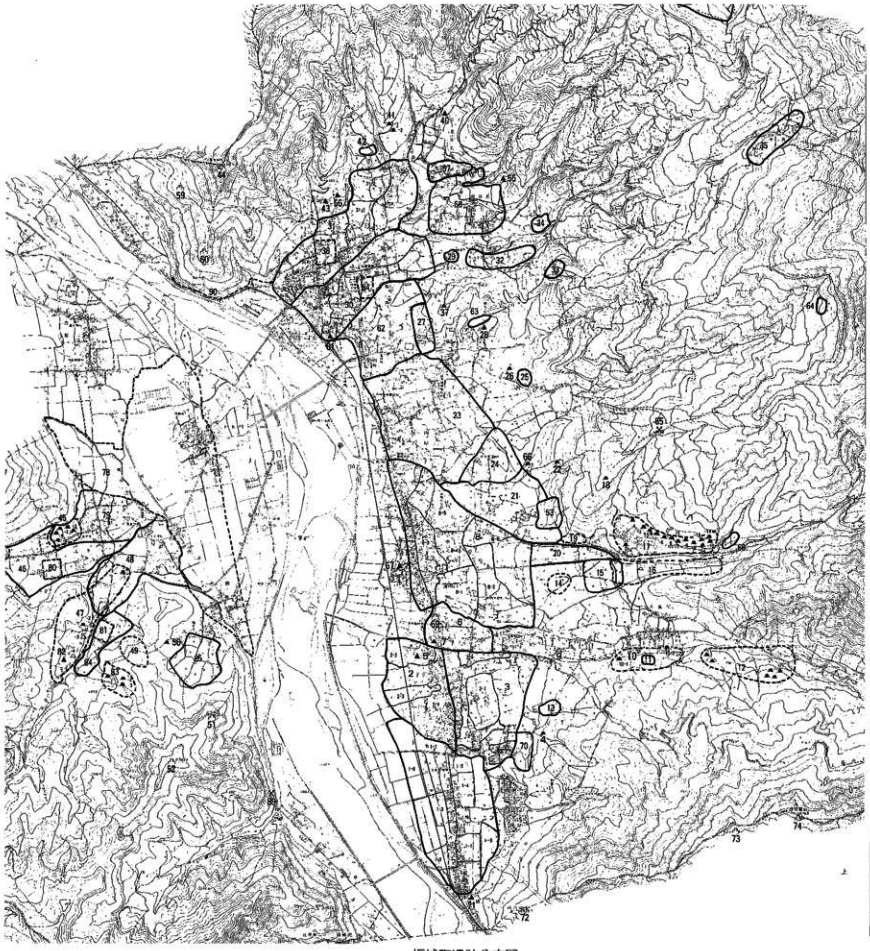
度調査実施）から当該期の遺物・遺構が検出されている。後期後半では、平成５年度に南条地区の塚田遺跡（１－７）で発掘調査が実施され、この時期に属する竪穴住居址36棟をはじめとする遺構が検出され、土器、石器、土製品、及び鉄製品（鉄斧）が出土している。

古墳時代では、前期古墳は確認されていないが、中期古墳には中之条地区の仮称東平１号墳・２号墳が挙げられる（註１）。これらは、平成５年度に飯長野県埋蔵文化財センターにより実施された上信越自動車道建設に伴う発掘調査で、埴輪や土器などの出土から、１号墳は５世紀第２四半期後半、２号墳は５世紀第２四半期前半に位置付けられた（若林　1999）。後期古墳では、町内でもいくつかの古墳群の存在が知られているが、中でも代表的なものは村上地区の福沢古墳群小野沢支群に属する御厨社古墳である。内部施設に千曲川水系最大の横穴式石室を持ち、室全長11.2mを測り、勾玉や切子玉、耳環などが出土している。古墳時代後期の集落は町内の南条地区や中之条地区において多く検出されている。祭祀遺跡として、特に環状に土器を配列された祭祀遺構が検出された南条地区の青木下遺跡（１－８）が注目される。青木下遺跡は現在整理中である。

奈良時代・平安時代の遺跡では、中之条地区の中之条遺跡群（８）とその周辺遺跡に多くの調査例があり、この地域における奈良・平安時代の状況が徐々に解明されつつある。具体的には、寺浦遺跡（８－１）、上町遺跡（８－２）、東町遺跡（８－３）、宮上遺跡（８－５）、北川原遺跡（８－６）、豊穂堂遺跡（20）、開畝遺跡（21）で調査が実施され、古墳時代後期後半～平安時代までの集落址が判明している。また、平安時代の生産遺跡として坂城地区の土井ノ入窯跡（32）があり、昭和41年発掘調査が実施され、瓦の生産が行われていたことが実証され、本遺跡で生産された瓦は、現在の坂城小学校がある場所に８世紀末～９世紀頃に存在していたとされる込山廃寺（54）に用いられたほか、上田市信濃国分寺・国分尼寺、千曲市正法廃寺の補修用の差し瓦として使用されていたことなどが判明している。また、千曲川右岸及び左岸の後背湿地では、仁和４（888）年に起きたとされる千曲川大洪水の被害を受け、氾濫砂層によって被覆された状態で発見された埋没水田址が塚田遺跡（１－７）、青木下遺跡（１－８）、上五明条里水田址（78）にて検出されている。

平安時代後期、寛治８年（嘉保元）（1094）に村上地区に配流されてきた源盛清が後に村上氏として勢力を持つようになり、村上信貞、村上満信などの活躍や戦国時代での村上義清の活躍が挙げられる。義清の頃、村上氏の館は現在の坂城地区の満泉寺一帯に所在したとされ、その背後にそびえる葛尾山の山頂には、義清が使用した葛尾城跡があるが城自体は現存していない。この館跡及び山城をセットとして、村上氏城館跡として長野県史跡に指定されている。このほか、中世の遺跡では坂城地区の北日名経塚（40）及び観音平経塚（55）を始めとする経塚と中之条地区の開畝製鉄遺跡（53）がある。北日名経塚は明治29年発見され、鋳銅製経筒や白磁輪花小皿、和鏡等の出土品が見られたが、現在東京国立博物館に所管されている。観音平経塚は昭和54年と平成４年に調査が行われたが、平成４年の調査では、経塚の年代は14世紀第２四半期とされ、その周辺の五輪塔群の造営時期は14世紀第２四半期から16世紀前半頃に位置付けられている（若林　1999）。開畝製鉄遺跡は、昭和52・53年に坂城町教育委員会によって学術調査が実施され、16世紀頃の製鉄炉址２基が確認されている。この調査は県内初の製鉄遺跡の学術調査として学史に位置づけられるものであった。

江戸時代に入ると、北国街道（80）の制定により、坂木宿が宿駅として発展した。元和８（1622）年に現在の坂木地区を主体とする坂木村、中之条地区を主体とする中之条村は幕府の直轄地である天領となり、重要な場所として位置づけられた。代官所は最初、坂木（61）に置かれたが、明和４年（1767）に焼失し、その後、安永８年（1779）には中之条に代官所（67）が置かれるようになった。北国街道も当時の官線道路として賑わいを見せていたとされている。



坂城町遺跡分布図

図面番号	遺跡名	種別	時代
1	南条遺跡群	集落址	弥生～平安
−1	南条遺跡群　宰宮遺跡	集落址	弥生～平安
−2	南条遺跡群　御殿遺遺跡（関屋）	集落址	弥生～平安
−3	南条遺跡群　百々目利遺跡	集落址	弥生～平安
−4	南条遺跡群　中町遺跡（新地）	集落址	弥生～平安
−5	南条遺跡群　田町遺跡	集落址	弥生～平安
−6	南条遺跡群　鍛り目遺跡	集落址	弥生～平安
−7	南条遺跡群　塚田遺跡（田端）	集落址	弥生～平安
−8	南条遺跡群　寄木下遺跡	水田址、祭祀跡	弥生～平安
2	金井西遺跡群	集落址	縄文～平安
−1	金井西遺跡群　金井遺跡	集落址	縄文～平安
−2	金井西遺跡群　社宮神遺跡（金井西）	集落址	縄文～平安
−3	金井西遺跡群　並木下遺跡	集落址	縄文～平安
3	金井東遺跡群	集落址	縄文～平安
−1	金井東遺跡群　保地遺跡	集落址	縄文～平安
−2	金井東遺跡群　山金井遺跡	集落址	縄文～平安
−3	金井東遺跡群　大木久保遺跡（南条小学校敷地）	集落址	縄文～平安
−4	金井東遺跡群　酒玉遺跡	集落址	縄文～平安
4	夢ヶ谷古墳	古　墳	古墳
5	社宮神経塔	経　塔	中世
6	町横尾遺跡	散布地	縄文～平安
7	北頭古墳	古　墳	古墳（後期）
8	中之条遺跡群	集落址	縄文～平安
−1	中之条遺跡群　寺満遺跡	集落址	縄文～平安
−2	中之条遺跡群　上町遺跡	集落址	弥生～平安
−3	中之条遺跡群　東町遺跡	集落址	弥生～平安
−4	中之条遺跡群　北浦遺跡	集落址	縄文～平安
−5	中之条遺跡群　笠上遺跡	集落址	縄文～平安
−6	中之条遺跡群　北川原遺跡	集落址	縄文～平安
9	南条塚穴古墳（塚穴古墳）	古　墳	古墳（後期）
10	谷川古墳群	古　墳	古墳（後期）
−1	谷川古墳群　入横尾支群　向田古墳	古　墳	古墳（後期）
−2	谷川古墳群　入横尾支群　冠塚古墳	古　墳	古墳（後期）
11	入横尾遺跡	散布地	平安
12	谷川古墳群　上原支群	古　墳	古墳（後期）
13	鉢形城跡群	城　郭	中世～近世
14	御堂川古墳群　山口支群	古　墳	古墳（後期）
15	山崎遺跡	散布地	縄文
16	御堂川古墳群　山崎支群	古　墳	古墳（後期）
17	御堂川古墳群　前山支群	古　墳	古墳（後期）
−1	御堂川古墳群　前山1号墳	古　墳	古墳（後期）
−2	御堂川古墳群　前山2号墳	古　墳	古墳（後期）
−3	御堂川古墳群　前山3号墳	古　墳	古墳（後期）
−4	御堂川古墳群　前山4号墳	古　墳	古墳（後期）
−5	御堂川古墳群　前山5号墳	古　墳	古墳（後期）
−6	御堂川古墳群　前山6号墳	古　墳	古墳（後期）
−7	御堂川古墳群　前山7号墳	古　墳	古墳（後期）
−8	御堂川古墳群　前山8号墳	古　墳	古墳（後期）
−9	御堂川古墳群　前山9号墳	古　墳	古墳（後期）
−10	御堂川古墳群　前山10号墳	古　墳	古墳（後期）
−11	御堂川古墳群　前山11号墳	古　墳	古墳（後期）
−12	御堂川古墳群　前山12号墳	古　墳	古墳（後期）
−13	御堂川古墳群　前山13号墳	古　墳	古墳（後期）
−14	御堂川古墳群　前山14号墳	古　墳	古墳（後期）
18	御堂川古墳群　東平支群　二塚古墳	古　墳	古墳（後期）
19	御堂川古墳群　山田支群	古　墳	古墳（後期）
20	鳥居堂遺跡（山崎北遺跡）	集落址	縄文～弥生
21	間組遺跡	集　落	弥生～平安
22	人塚古墳	古　墳	古墳（後期）
23	南ツ屋遺跡群	集落址	縄文～平安
24	成久保遺跡	集落址	古墳～平安
25	入間遺跡	散布地	奈良～平安
26	塚穴古墳（御所沢古墳）	古　墳	古墳（後期）
27	金比羅山遺跡	散布地	縄文～平安
28	蓮平経塔	経　塔	中世
29	岡の原窯跡	窯　跡	平安
30	迅山遺跡群	集落址	縄文～平安
−1	迅山遺跡群　迅山A遺跡（水上）	集落址	縄文～平安
−2	迅山遺跡群　迅山B遺跡（社宮神）	集落址	縄文～平安
−3	迅山遺跡群　迅山C遺跡（迅山）	集落址	縄文～平安
−4	迅山遺跡群　迅山D遺跡（横町）	集落址	縄文～平安
−5	迅山遺跡群　迅山E遺跡（立町）	集落址	縄文～平安
31	日名沢遺跡群	集落址	弥生～平安
−1	日名沢遺跡群　日名沢遺跡	集落址	弥生～平安
−2	日名沢遺跡群　丸山遺跡	集落址	弥生～平安
32	上井ノ入窯跡	窯　跡	奈良～平安
33	平林遺跡	散布地	縄文

図面番号	遺跡名	種別	時代
34	堀外窯跡	窯　跡	平安
35	年沢遺跡	散布地	縄文
36	神平遺跡群	集落址、散布地	縄文～平安
−1	神平遺跡群　神平A遺跡	集落址	縄文～平安
−2	神平遺跡群　神平B遺跡	散布地	弥生
−3	神平遺跡群　神平C遺跡	散布地	平安
37	金比羅山古墳	古　墳	古墳（後期）
38	村上氏館跡	城館跡	中世
39	馬の背遺跡	散布地	縄文
40	北日名経塚	経　塚	中世
41	北日名塚穴古墳群	古　墳	古墳（後期）
−1	北日名塚穴1号墳	古　墳	古墳（後期）
−2	北日名塚穴2号墳	古　墳	古墳（後期）
42	後ノ木遺跡	散布地	縄文
43	柴田窯跡	窯　跡	奈良
44	祇園城跡	城館跡	中世
45	出浦沢古墳群	古　墳	古墳（後期）
−1	出浦沢古墳群　出浦支群1号墳	古　墳	古墳（後期）
−2	出浦沢古墳群　出浦支群2号墳	古　墳	古墳（後期）
−3	出浦沢古墳群　出浦支群3号墳	古　墳	古墳（後期）
−4	出浦沢古墳群　出浦支群4号墳	古　墳	古墳（後期）
−5	出浦沢古墳群　出浦支群5号墳	古　墳	古墳（後期）
−6	出浦沢古墳群　鼻支群1号墳	古　墳	古墳（後期）
−7	出浦沢古墳群　鼻支群2号墳	古　墳	古墳（後期）
46	鼻遺跡	集落址	弥生～平安
47	張沢古墳群	古　墳	古墳（後期）
−1	張沢古墳群　小野沢支群1号墳（御殿社古墳）	古　墳	古墳（後期）
−2	張沢古墳群　小野沢支群2号墳	古　墳	古墳（後期）
−3	張沢古墳群　小野沢支群3号墳（ヤックラ古墳）	古　墳	古墳（後期）
−4	張沢古墳群　小野沢支群4号墳	古　墳	古墳（後期）
48	小野沢遺跡	集落址	弥生～平安
49	張沢古墳群　鼠窪支群	古　墳	古墳（後期）
50	福泉寺裏古墳	古　墳	古墳（後期）
51	望月城跡	城館跡	中世
52	三本城跡	城館跡	中世
53	関和泉城遺跡	城館跡	中世
54	法山寺寺跡	寺院跡	平安
55	鍋倉平経塚	経　塚	中世
56	栗田小鍛冶跡	製鉄跡	中世
57	塩之沢遺跡	集落址	奈良～平安
58	南日名遺跡	集落址	弥生～平安
59	鷲尾城跡小屋跡	城館跡	中世
60	姫城跡	城館跡	中世
61	坂本代官所跡	屋敷跡	近世
62	田町遺跡群	散布地	古墳～平安
63	横所沢遺墓群	墳　墓	中世
64	雷平窯跡	窯　跡	平安
65	中之条石切場跡	採掘跡	近世
66	張沢古墳	古　墳	古墳（後期）
67	中之条代官所跡	屋敷跡	近世
68	鳴瀬窯跡	窯　跡	平安
69	鎧倉御城跡	城館跡	中世
70	南組の川遺跡（吉祥寺跡）	散布地・寺院跡	奈良～中世
71	口留番所跡	屋敷跡	近世
72	神谷城跡	城館跡	中世
73	高ノ平城跡	城館跡	中世
74	赤坂鼠山城跡	城館跡	中世
75	地獄沢黄鉄鉱採掘跡	採掘跡	近世
76	曽谷遺跡	散布地	平安
77	出浦城跡	城館跡	中世
78	上五明条里水田址	水田址	平安～近世
79	出浦遺跡	集落址	縄文～平安
80	村上氏館跡	城館跡	中世
81	張沢氏館跡	城館跡	中世
82	小野沢窯跡	窯　跡	奈良～平安
83	張沢古墳群	古　墳	古墳（後期）
−1	張沢古墳群　五狭支群1号墳	古　墳	古墳（後期）
−2	張沢古墳群　五狭支群2号墳	古　墳	古墳（後期）
−3	張沢古墳群　五狭支群3号墳	古　墳	古墳（後期）
84	笠原遺跡	集落址	縄文～平安
85	鼎田原遺跡	集落址	縄文～平安
86	禁屋跡	祭祀跡	平安
87	島青銅鉱採掘跡	採掘跡	近代
88	島マンガン鉱採掘跡	採掘跡	近代
89	上平黄銅鉱採掘跡	採掘跡	近代
90	横林北国街道跡	街道跡	近世

以上、簡単ではあるが近世までの坂城町の歴史を概略したわけであるが、坂城地区の込山遺跡群周辺では、縄文時代早期～晩期及び弥生～平安時代の集落址の存在する可能性があること、古代の込山廃寺といった寺院の存在からこの込山遺跡群周辺が特殊な地域である事が判明している。また、近世においても北国街道が同遺跡内を通っている事から、近世においても重要な役割のあった場所であった事が判明している。

註

註1　周知の御筑川古墳群東平支群1号墳・2号墳とは異なる可能性があるため、報告書内において仮称東平1・2号墳とされている。今後、正式な古墳名称の確定が必要である。

参考文献（五十音順・敬称略）

坂城町教育委員会　1978『開畝製鉄遺跡―第1次調査報告』 1979『開畝製鉄遺跡―第2次調査報告』 1993『宮上遺跡Ⅱ』 1995『東裏遺跡』 1996『豊練堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』 1996『寺浦遺跡Ⅱ』 2000『開畝遺跡Ⅲ』 2001『宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』2001『北川原遺跡Ⅱ』 2002『保地遺跡Ⅱ』

関　孝一　1966「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」『考古学雑誌』第51巻第3号

森嶋　稔はか　1981『坂城町誌』中巻　歴史編（一）

勝川　朋広　1997「長野県埴科郡坂城町青木下遺跡Ⅱの祭祀遺構」『祭祀考古』第8号

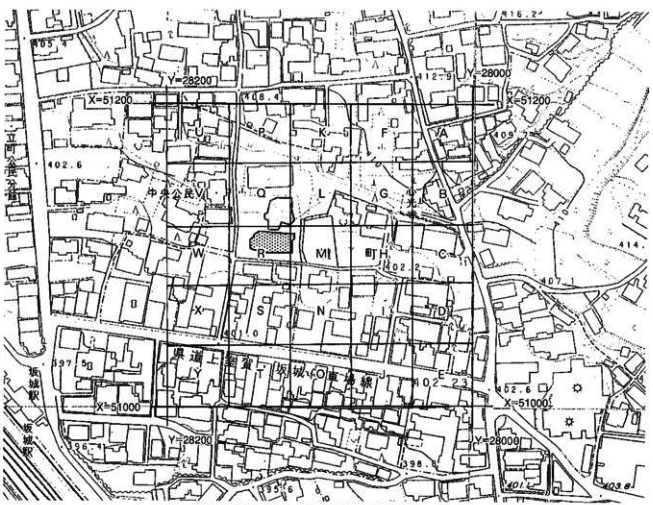
柳沢　亮　1998「第5館　開畝遺跡」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2』㈶長野県埋蔵文化財センター

若林　卓　1999「第9章　東平古墳群」「第11章　観音平経塚」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21』㈶長野県埋蔵文化財センター

第３節　調査の概要

１　調査の方法

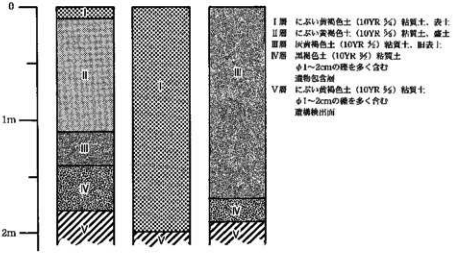
本遺跡の調査では、調査区の遺構･遺物の正確な位置を記録でき、なお、将来的に周辺に所在する遺跡の発掘調査での遺構・遺物の調査にも整合できるように、Ⅷ系国家座標の座標軸を基にグリッドを組んだ。グリッドについては、200m×200mの大グリッドを設け区画を行い、その中を40m×40mに25等分した中グリッドを設定（第３図）し、北東端より「Ａ・Ｂ・Ｃ・・・Ｙ」区とアルファベットの大文字で命名した。本調査区では、Ｍ・Ｒ区がこの中グリッドに相当する。また、その中グリッドを４ｍ×４ｍの小グリッドで100区画に分割し、南北列を北から算用数字で「１・２・３・・・10」、東西列を東から五十音順で「あ・い・う・・・こ」と呼称することとした。例えば、その中の北東交点を五十音→数字で表し「あ１」というように命名した。中グリッドのアルファベット→五十音→数字で呼称したグリッド名は例えば「Ｍあ１グリッド」と命名し、この命名されたグリッド名によって遺構に伴わない遺物の取り上げや遺構図の作成の基準とした。また、発掘調査における遺構の実測は、１／20を基準として簡易遺り方実測にて行った。



第３図　込山C遺跡Ⅱ　発掘調査区設定図（1：2500）

2　基本層序

込山C遺跡Ⅱの調査区内はかつて工場等が建設されていた経過があり、造成によって削平及び盛土によって基本層序がだいぶ様相を変えられていた。調査の断面観察によって、盛土等が施され遺構検出面が地下深く埋没しているところと、工場等解体時における攪乱により遺構検出面まで破壊されている状況が看取された。攪乱の範囲は非常に広く、調査対象地の半分以上が攪乱されていた。



第４図　基本層序模式図

これらの状況を面的に見ると南側は造成による盛土が堆積し、北側には攪乱が多く存在していた。

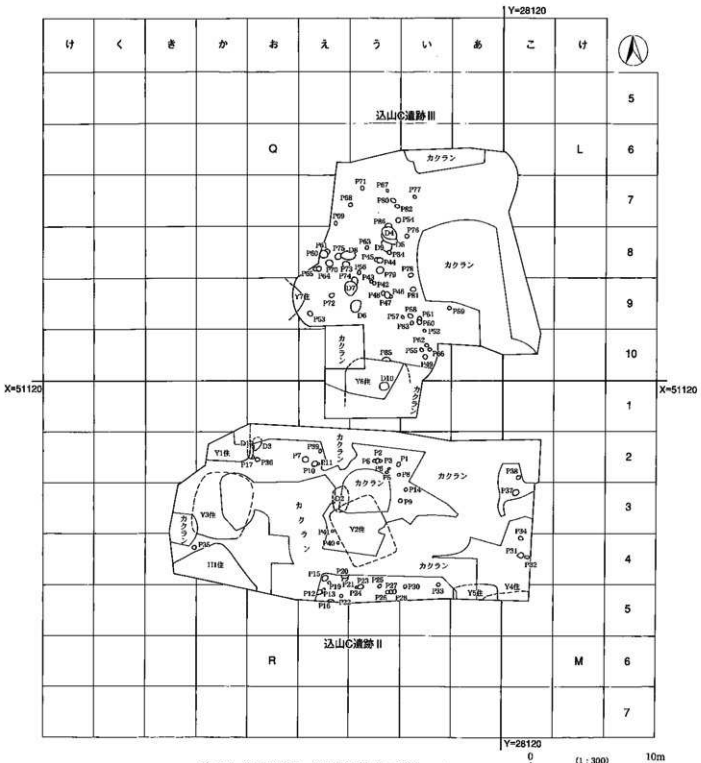
基本層序は、調査区の南側ではⅠ層が表土層、Ⅱ層が盛土層、Ⅲ層が旧表土層、Ⅳ層が遺物包含層でⅤ層が遺構検出面であった。先述のとおり遺構の検出は、攪乱層及び盛土が厚く堆積し、約1.8～２ｍ下のⅣ層にて行った。

3　検出された遺構・遺物

込山C遺跡Ⅱの調査区内において検出された遺構・遺物は下記のとおりである。

遺構）

弥生時代	竪穴住居址	５棟
古墳時代	竪穴住居址	１棟
時期不明	土坑址	３基
	ピット	41基



第５図　込山C遺跡Ⅱ　遺構配置図（1：300）

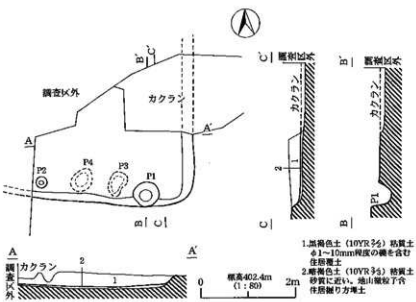
第４節　調査の結果

１　竪穴住居址

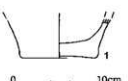
１）Ｙ１号住居址

遺構（第６図）

検出位置　Ｒか２、Ｒお２グリッド。**重複関係**　なし。**平面形態**　南壁及び東壁の一部のみの検出であるため断定はできないが、方形あるいは長方形を呈するものと思われる。主軸方位は不明である。壁残高は攪乱されているところが多いが、17～25㎝を測る。**覆土**　黒褐色の粘質土に被覆されていた。**床面の状態**　比較的堅固な状態であった。**炉**　検出されなかったが、調査区域外に存在すると思われる。**ピット**　４基検出され、２基は住居址床面にて検出されている。調査区域外に遺構が続くので、主柱穴ははっきりしない。**遺物の出土状況**　出土土器としては甕・壺が出土しているが量的には少ない。



第６図　Ｙ１号住居址実測図



第７図Ｙ１号住居址
出土土器実測図

遺物（第７図）

出土遺物量は少なく、図示できるものは１点のみである。１は弥生時代の壺の底部である。

時期　本住居址の所産時期は出土遺物が少ないため、弥生時代後期頃としたい。

２）Ｙ２号住居址

遺構（第８図）

検出位置　Ｒう３・４、Ｒえ３・４グリッド。**重複関係**　なし。**平面形態**　北壁及び西壁、東壁の一部、住居址中央部床面のみの検出であるため詳細は不明であるが、長方形を呈するものと思われる。主軸方位は推定で、Ｎ―27°―Ｗを図る。壁残高は攪乱されているところが多いが、北壁47～49㎝、西壁37～39㎝を測る。**覆土**　黒褐色及び暗褐色の粘質土に被覆されていた。**床面の状態**　比較的堅固な状態であった。**炉**　検出されなかった。**ピット**　12基検出され、Ｐ１は深さ14㎝、Ｐ２は深さ10㎝、Ｐ３は深さ６㎝、Ｐ４は深さ４～７㎝、Ｐ５は深さ15㎝、Ｐ６は19㎝、Ｐ７は深さ５～６㎝、Ｐ８は34～35㎝、Ｐ９は13～15㎝、Ｐ10は26㎝、Ｐ11は９～10㎝、Ｐ12は８～11㎝で、Ｐ１～Ｐ６まで床面にて検出された。

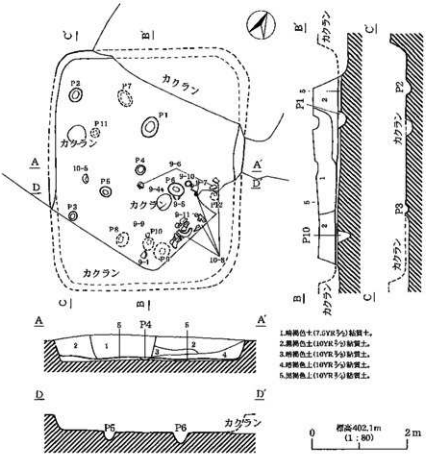
遺物の出土状況　住居址中央付近にて多く出土している。

遺物（第９・10図）

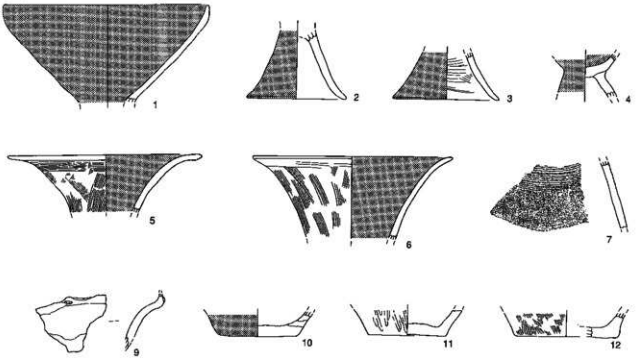
本住居址で図示できた遺物は高坏、壺、甑などである。１～４は高坏で内外面赤色塗彩される。

５～６は壺の口縁部である。内面に赤色塗彩が施され、外面は縦方向のハケメが残っている。７は頸部に横位の櫛描文が施されている壺、８は頸部に８単位の横位の櫛状工具による施文がある壺である。９は浅黄橙色を呈する口縁端部にボタン状貼り付けがなされるパレススタイルの壺である。10～17までは壺の底部である。18は甑の底部である。19は甕の口縁部である。20は磨製の石鏃である。

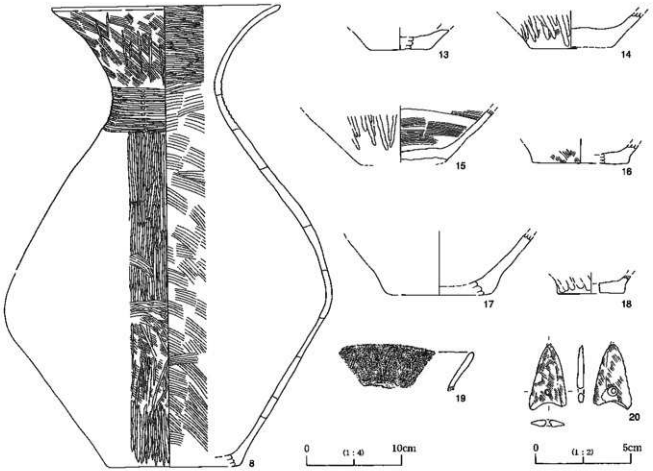
時期　本住居址の所産時期は弥生時代後期前半頃としたい。



第８図　Ｙ２号住居址実測図



第９図　Ｙ２号住居址出土土器実測図

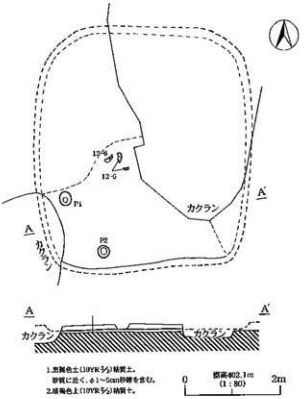


第10図　Y2号住居址出土土器・石器実測図

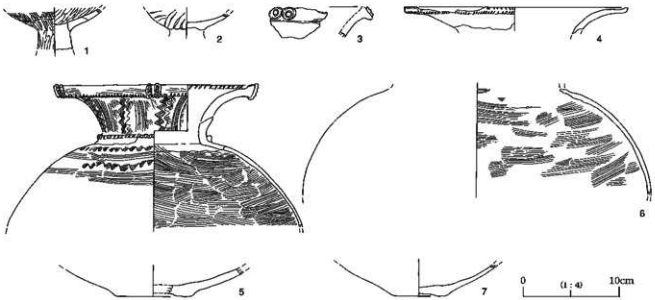
3）Y3号住居址

遺構（第11図）

検出位置　Rか3・4、Rき3、Rお3グリッド。**重複関係**　なし。**平面形態**　住居址南側部床面のみの検出であるため詳細は不明であるが、長方形を呈するものと思われる。主軸方位は推定で、N—10°—Wを図る。壁残高は攪乱されているところが多く、南側の床面のみ検出したため不明である。**覆土**　黒褐色及び暗褐色の粘質土に被覆されていた。**床面の状態**　軟弱な状態であった。**炉**　検出されなかった。**ピット**　2基検出され、P1は深さ15～18cm、P2は深さ14～16cmを測る。**遺物の出土状況**　住居址南側付近にて少量出土している。



第11図　Y3号住居址実測図



第12図　Y３号住居址出土土器実測図

遺物（第12図）

本住居址で図示できた遺物は高坏、壺などである。１は高坏である。２は胎土が精製されないもので高坏とも考えられる。３～７は壺で３～６は東海地方に良く見られるパレススタイルの壺である。胎土が灰白色を呈し、搬入品の可能性が考えられる。

時期　本住居址の所産時期は弥生時代後期前半頃としたい。

４）Ｙ４号住居址

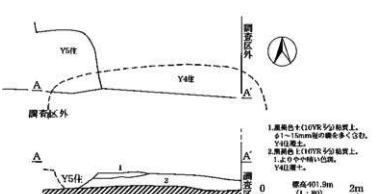
遺構（第13図）

検出位置　Ｍこ５、Ｒあ５グリッド。**重複関係**　Ｙ５号住居址に破壊される。**平面形態**　不明。主軸方位は不明。壁残高は不明であるが約30cmの遺構覆土が調査区域外との掘削面から確認されている。**覆土**　黒褐色の粘質土に被覆されていた。**床面の状態**　軟弱な状態と思われる。**炉**　検出されなかった。

ピット　検出されなかった。

遺物の出土状況　出土していない。

時期　本住居址の所産時期は弥生時代後期頃としたい。



第13図　Ｙ４号住居址実測図

5）Ｙ５号住居址

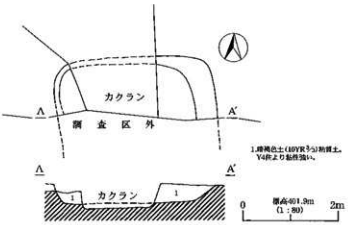
遺構（第14図）

検出位置　Ｒあ５グリッド。**重複関係**　Ｙ４号住居址を破壊する。**平面形態**　不明。主軸方位は不明。壁残高は13～26cmを測る。**覆土**　暗褐色粘質土に被覆されていた。**床面の状態**　撹乱が中央部分に入り強固な床面とは言いがたい。

炉　検出されなかった。

ピット　検出されなかった

遺物の出土状況　出土していない。



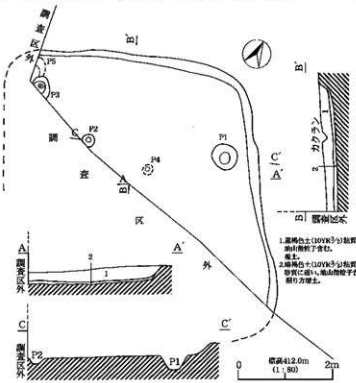
第14図　Ｙ５号住居址実測図

時期　本住居址の所産時期は弥生時代後期頃としたい。

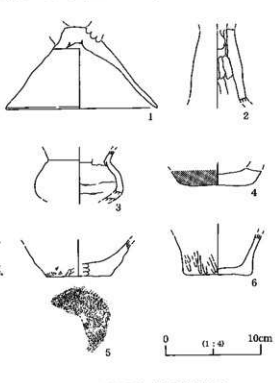
6）Ｈ１号住居址

遺構（第15図）

検出位置　Ｒお５、Ｒか４・５、Ｒき４グリッド。**重複関係**　調査区外に伸びているため詳細不明。平面形態　北壁及び東壁の一部のみの検出であるため断定はできないが、長方形を呈するものと思われる。主軸方位は不明である。壁残高は17～25cmを測る。**覆土**　黒褐色及び暗褐色の粘質土に被覆されていた。**床面の状態**　比較的堅固な状態であった。**カマド**　検出されなかったが、調査区域外に存在すると思われる。**ピット**　５基検出され、３基は住居址床面にて検出されている。Ｐ１は深さ32cm、Ｐ２は深さ12cm、Ｐ３はテラスを有し深さ14～36cm、Ｐ４は深さ５～７cm、Ｐ５はＰ３に切られている。主柱穴は調査区域外に続くためもあってはっきりしない。**遺物の出土状況**　出土土器としては壺や高坏・壺が出土している。



第15図　Ｈ１号住居址実測図



第16図　Ｈ１号住居址 出土土器実測図

遺物（第16図）

本住居址で図示できた遺物は蓋、高坏、壺などである。1は高坏である。裾部がラッパ状に広がる大型の高坏脚部である。2は裾部が広がらない高坏の脚部である。3は直口壺と思われる。4～6は壺・甕の底部である。5の底部には繊維の痕跡が残っている。

時期　本住居址の所産時期は古墳時代としたい。

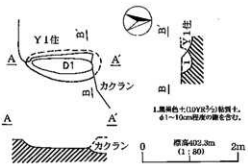
2　土坑址

1）D1号土坑址

遺構（第17図）

検出位置　Rお2、Rか2グリッド。　**重複関係**　Y1号住居址に破壊される。P17を破壊する。　**平面形態**　楕円形を呈する。長軸4m、短軸1.6mを計り、主軸方位はN—4°—Wを指す。深さは18～24cmを測る。　**覆土**　黒褐色の粘質土に被覆されていた。遺物は弥生時代の高坏など出土している。

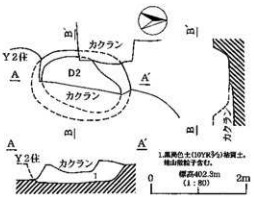
時期　弥生時代の遺物が出土しているので、弥生時代と位置付けたい。

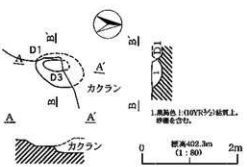


2）D2号土坑址

遺構（第17図）

検出位置　Rえ3グリッド。　**重複関係**　Y2号住居址に破壊される。　**平面形態**　楕円形を呈する。長軸5.3m、短軸3.7mを計り、主軸方位はN—2°—Wを指す。深さは18～36cmを測る。





第17図　D1～D3号土坑址実測図

覆土　黒褐色の粘質土に被覆されていた。遺物は弥生時代の甕や土師器の甕など出土している。

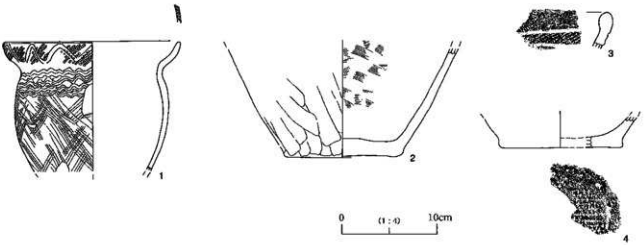
時期　土師器の出土から古墳時代以降と位置付けたい。

3）D3号土坑址

遺構（第17図）

検出位置　Rお2グリッド。　**重複関係**　D1号土坑址に破壊される。　**平面形態**　楕円形を呈する。長軸2.2m、短軸1.3mを計り、主軸方位はN—5°—Eを指す。深さは20cmを測る。　**覆土**　黒褐色の粘質土に被覆されていた。遺物は土師器の甕などが少量出土している。

時期　土師器の出土から古墳時代以降と位置付けたい。



第18図　ピット及びグリッド出土土器実測図

3　ピット及びグリッド出土土器

ここでは、ピット及びグリッド出土の土器について触れることとする。

遺　物　第18図

1は弥生中期に位置づけられる甕で、ＲＬの縄文原体を施文した後波状の沈線を施している。胴上部は櫛描波状文が施され、胴下部は羽状の沈線が施されている。Ｐ38からの出土である。2は弥生土器の壺の底部である。Ｒえ３グリッドからの出土である。3は縄文時代の中期に位置付けられる甕の口縁部である。加曾利Ｂ式とも思われる。4は縄文土器の網代底の甕である。

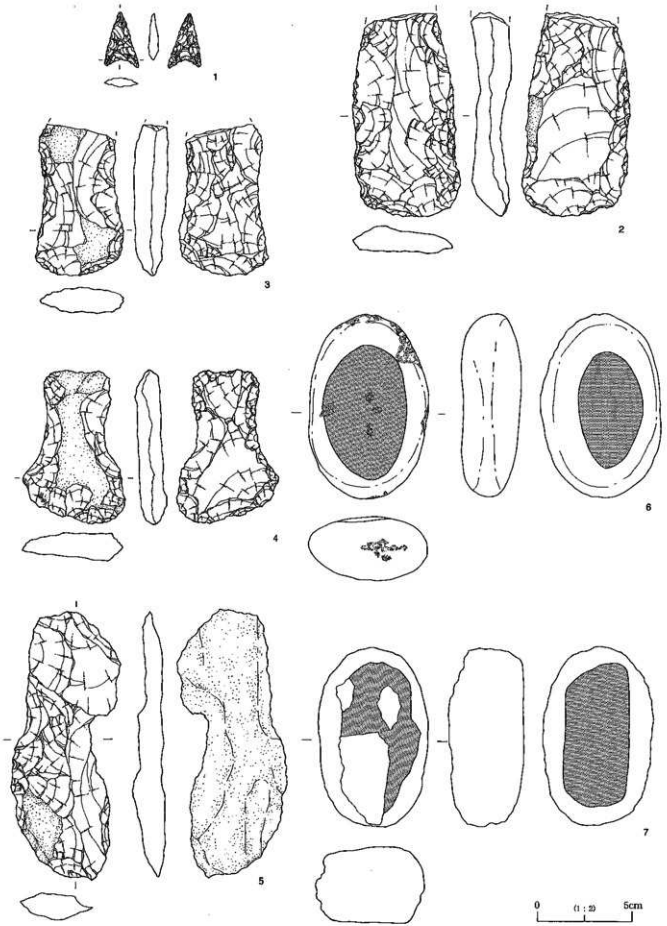
4　調査区出土石器

ここでは調査区内出土の石器を掲載することとする。遺構出土のものも存在している。

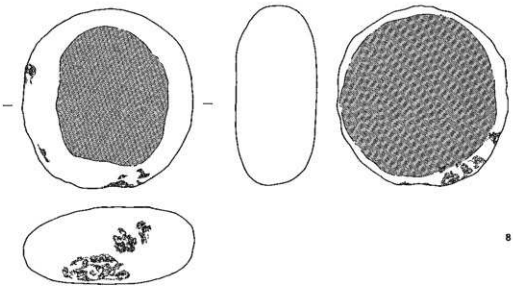
遺物　第19・20図

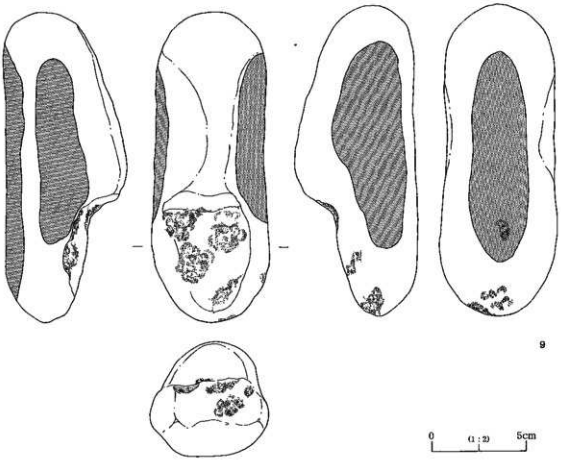
打製石器では１～５までの石鏃や打製石斧がある。１はチャート製の石鏃である。Ｙ１号住居址からの出土である。２～５までは打製石斧で、２～３は基部先端が欠損している。２はＹ２号住居址の出土で、３はＹ１号住居址からの出土である。４は撥型の打製石斧である。Ｙ２号住居址からの出土である。５は打製石斧の未製品と思われるもので、礫片面に剝離が施されている。Ｙ２号住居址からの出土である。

次に磨製石器であるが、６～９まであり、６は磨石とも思われるものである。Ｙ２号住居址からの出土である。７は磨石で多孔質の軽石を素材としたもので、両面が共によく研磨されている。Ｈ１号住居址からの出土である。８は磨石でＹ１号住居址からの出土である。９は磨石、あるいは敲き石とも思われるものである。調査区域内からの出土は確かであるが、詳細は不明である。



第19図　調査区出土石器実測図





第20図　調査区出土石器実測図

第1表　出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量（cm）	残存度	調整 外面	調整 内面	胎土	備考
7－1	Y 1号住居址	弥生	壺	－ 8.0 (3.9)	底部	摩滅	ナデ	7.5YR 6/4 にぶい橙色土	
9－1	Y 2号住居址	弥生	高坏	〈21.2〉 － 〈10.4〉	坏部1/2	赤色塗彩	赤色塗彩	5YR 6/6 橙色土	
9－2	Y 2号住居址	弥生	高坏	－ 〈10.6〉 (7.3)	脚部	赤色塗彩	ヨコナデ	7.5YR 5/3 にぶい褐色土	
9－3	Y 2号住居址	弥生	高坏	－ 〈11.2〉 (4.9)	脚部	赤色塗彩	横方向のハケ	5YR 6/6 橙色土	
9－4	Y 2号住居址	弥生	高坏	－ － (4.5)	坏底部～基部	赤色塗彩	ナデ、赤色塗彩	7.5YR にぶい橙色土	
9－5	Y 2号住居址	弥生	壺	(6.0) 〈19.9〉 －	口縁部	縦方向のハケ、端部横方向のハケ	赤色塗彩	5YR 7/6 橙色土	
9－6	Y 2号住居址	弥生	壺	8.5 〈21.2〉 －	口縁部1/2	縦方向のハケ	赤色塗彩	7.5YR 7/4 にぶい橙色土	
9－7	Y 2号住居址	弥生	壺	－ － －	頸部～胴部片	頸部櫛描羅状文	ハケ	5YR 6/6 橙色土	破片実測
9－9	Y 2号住居址	弥生	壺	－ － (6.0)	口縁部1/8	ボタン状貼付文	赤色塗彩	7.5YR 8/4 浅黄橙色土	パレス
9－10	Y 2号住居址	弥生	壺	－ 8.4 (2.5)	底部	赤色塗彩	ナデ	7.5YR 7/4 にぶい橙色土	
9－11	Y 2号住居址	弥生	壺	〈8.2〉 (2.7)	底部1/4	縦方向のヘラミガキ	ナデ	7.5YR 6/4 にぶい橙色土	輪積痕有
9－12	Y 2号住居址	弥生	壺	－ 〈10.8〉 (2.4)	底部1/4	縦方向のハケ	ナデ	10YR 6/4 にぶい黄橙色土	
10－8	Y 2号住居址	弥生	壺	23.9 13.9 48.5	ほぼ完形	口縁部ハケ→ミガキ、頸部櫛描羅状文（8本1組）二周目で簾状止め、胴部一部ハケ→ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ、一部赤色塗彩残、胴部ハケ	外面 5YR 6/6 橙色土 内面 10YR 2/1 黒色土	
10－13	Y 2号住居址	弥生	壺	－ 〈6.2〉 (2.0)	底部1/4			10YR 7/4 にぶい黄橙色土	
10－14	Y 2号住居址	弥生	壺	－ 8.6 (3.5)	底部	ハケ→縦方向のヘラミガキ	剥落しているがナデ	7.5YR 7/6 橙色土	
10－15	Y 2号住居址	弥生	壺	－ 〈9.0〉 (5.7)	胴部～底部1/2	縦方向のヘラミガキ	横方向のハケ	7.5YR 7/4 にぶい橙色土	
10－16	Y 2号住居址	弥生	壺	－ 〈10.0〉 (2.4)	底部1/3	ハケ	摩滅	7.5YR 8/4 浅黄橙色土	
10－17	Y 2号住居址	弥生	壺	－ 〈10.4〉 (6.7)	胴部～底部	ナデ	摩滅	10YR 7/4 にぶい黄橙色土	
10－18	Y 2号住居址	弥生	甕	－ － 〈6.8〉 (1.8)	底部1/4	ヘラナデ？		5YR 6/4 にぶい橙色土	
10－19	Y 2号住居址	弥生	壺	－ － －	口縁部1/4	口縁部波状文		7.5YR 7/6 橙色土	破片実測

第2表　出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(cm)	残存度	調整 外面	調整 内面	胎土	備考
12-1	Y3号住居	弥生	高杯?	– – (4.8)	坏部～基部	ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.5YR6/6 橙色土	
12-2	Y3号住居址	弥生	高坏?	– – (2.5)	坏底部	ヘラナデ	ナデ	2.5YR5/6 明赤褐色土	
12-3	Y3号住居址	弥生	壷	– – –	口縁片	ボタン状貼付文		外面 7.5YR8/2 灰白色土 断面 10YR2/1 黒色	パレス、破片実測
12-4	Y3号住居址	弥生	壷	〈23.4〉 – (2.2)	口縁部			10YR7/1 灰白色	パレス?
12-5	Y3号住居址	弥生	壷	〈21.2〉 〈7.7〉 (15.2)	口縁部～底部2/3	赤色塗彩、頸部貼付隆帯稜頂櫛歯による刻み	赤色塗彩、胴部ハケ	外面 10YR7/1 灰白色土 断面 10YR2/1 黒色土	パレス
12-6	Y3号住居址	弥生	壷	– – (12.0)	胴部	ナデ	横方向のハケ	10YR7/1 灰白色土	
12-7	Y3号住居址	弥生	壷	– 〈4.8〉 (3.8)	底部1/3	ミガキ	ナデ	外面 7.5YR7/4 にぶい橙色土 断面 10YR2/1 黒色土	
16-1	H1号住居址	土師器	高坏	– 〈15.9〉 (8.6)	脚部	摩滅	摩滅	7.5YR7/4 にぶい橙色土	
16-2	H1号住居址	土師器	高坏	– – (7.6)	脚部	摩滅	ヘラケズリ	5YR6/4 にぶい橙色土	
16-3	H1号住居址	土師器	直口壷?	– – (5.2)	頸部～胴部1/3			7.5YR8/4 浅黄橙色土	
16-4	H1号住居址	土師器	壷	– 7.1 (1.5)	底部			2.5YR5/6 明赤褐色土	
16-5	H1号住居址	土師器	壷	– 6.8 (3.3)	底部1/2	底部木葉痕	ナデ	2.5YR6/8 橙色土	
16-6	H1号住居址	土師器	壷	– 〈4.2〉 (7.0)	底部1/2	縦方向のヘラミガキ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐色土	
18-1	P38	弥生	壷	〈18.5〉 – (13.8)	口縁部～胴部1/3	口縁部縄文→波状文、頸部波状文、胴部羽状文?	丁寧なナデ	外面・断面 10YR2/1黒色土 内面 7.5YR4/3 褐色	
18-2	Rえ3G	弥生	壷	– 11.6 (11.5)	胴部～底部	ヘラナデ	ハケ	7.5YR6/4 にぶい橙色土	
18-3	Y1号住居址	縄文	壷	– – –	口縁部			10YR6/4 にぶい黄橙色土	破片実測
18-4	H1号住居址	縄文	壷	– 〈12.6〉 (3.2)	底部	摩滅、底部網代痕	摩滅	7.5YR6/4 にぶい橙色土	

込山C遺跡Ⅱ　航空写真

Y2住　10−8(1：4)

Y1住　19−3(1：2)

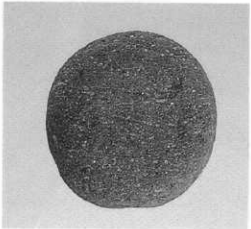
Y1住19−1(1:2) Y2住10−20(1:2)

Y2住　19−4(1：2)

Y2住　19−2(1：2)

Y2住　19−5(1：2)

Y3住　12−5(1：4)



Y1住　20−1(1：2)

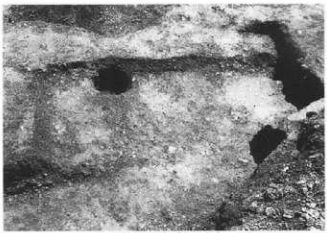
Rえ3グリッド18−2(1：4)

Z　20−2(1：2)

P38　18−1(1：4)

Y2住　19−6(1：2)

H1住　19−7(1：2)


Y１号住居址（北より）

Y２号住居址（南より）

Y３号住居址（西より）

H１号住居址（南西より）

D１号土抗址（西より）

D２号土抗址（東より）

D３号土抗址（西より）

第Ⅱ章　込山C遺跡Ⅲ

第1節　発掘調査の経緯

1　発掘調査における動機と経緯

込山遺跡群は坂城町坂城に所在し、標高397.4～463.4mを測る日名沢川によって形成された扇状地の扇央部、千曲川の段丘上に位置する。平成元年度に作成された『坂城町遺跡分布図』によると、縄文～平安時代の複合遺跡とされている。本遺跡群は広範囲に広がっているため、込山A・B・C・D・E遺跡と細分化され、込山遺跡群の中には、古代寺院であった込山廃寺も所在している。本遺跡周辺では、昭和36年に縄文中期の住居址の検出、坂城駅の拡張工事によって、込山D遺跡（註1）から縄文時代晩期の遮光器土偶が出土している。平成11年度町営住宅建設による込山B遺跡の調査では弥生時代中期と平安時代の住居址が検出されている。平成12年度実施の坂城保育園建設事業によって、縄文時代早期の住居址、中期の住居址、平安時代の住居址などが検出されており、込山廃寺に程近い調査地点であることから、寺院に関連する布目瓦が出土している。これらのことから、込山遺跡群は寺院関係の遺跡であると共に縄文時代中期・晩期や弥生時代中期～平安時代の遺跡であることが判明している。

今回、鉄の展示館に隣接してコミュニティセンター建設事業が計画され、込山C遺跡の破壊が余儀なくされることになり、坂城町商工課と坂城町教育委員会生涯学習課による保護協議の結果、隣接する込山C遺跡Ⅱでは遺構・遺物の出土はあったが、今回の場所での攪乱の状況や費用、調査計画の立案の関係から試掘調査が行われた。試掘調査の結果では対象地には攪乱による破壊が多かったわけではあるが、遺構・遺物の検出が見られたため、記録保存を前提とした発掘調査を実施する事となった。

註

（註1）込山C遺跡Ⅱの発掘調査における動機と経緯参照

第21図　込山C遺跡Ⅲ　位置図（1：25000）

2　調査の構成

発掘調査の体制

調査指導者　塩入　秀敏（上田女子短期大学教授、日本考古学協会会員）
現場担当者　齋藤　達也（坂城町教育委員会学芸員）
整理担当者　助川　朋広（坂城町教育委員会学芸員）
協　力　者　朝倉　妙子、天田　澄子、坂巻　ケン子、田中　浩江、千野　美樹、塚田　さゆり、
萩野　れい子（以上、町臨時職員）
赤羽　敏雄、荒川　園子、滝沢　袈裟夫、塚田　智子、増田　勇、前田　忠、三井　重子、
宮下　宣吉、柳原　嘉伸（以上、㈱更埴地域シルバー人材センター派遣）

事務局の構成

教　育　長　大橋　幸文（～平成17年６月30日）
柳澤　哲　（平成17年７月１日～）
教育次長　宮原　健一（～平成13年３月31日、生涯学習課長兼務）
生涯学習課長　塚田　好一（平成14年４月１日～）
文化財係長　池田　弥惣（～平成13年３月31日）
坂口　ふみ江（平成14年４月１日～平成15年３月31日）
助川　朋広（平成15年４月１日～）
文化財係　宮入　正代（平成17年４月１日～）
助川　朋広（～平成15年３月31日）
齋藤　達也（～平成16年度）
朝倉　妙子、天田　澄子、坂巻　ケン子、田中　浩江、千野　美樹、塚田　さゆり、
萩野　れい子（以上、臨時職員）

3　調査日誌

平成14年度発掘調査実施。

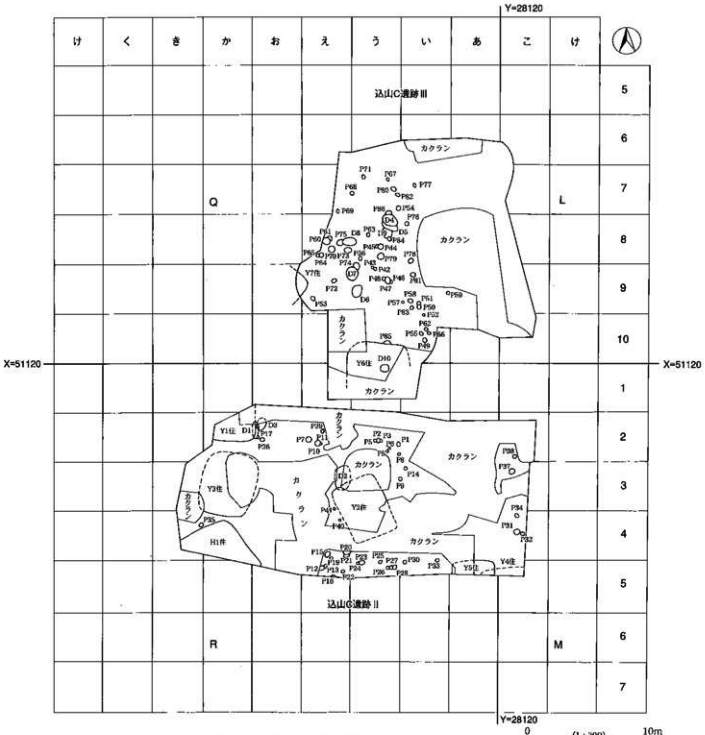
７月15日　本日よりバックホーによる表土剝ぎを実施する。
７月20日　機材等搬入を行う。
７月21日　本日からシルバー人材センター協力者を加え作業開始する。
７月28日　本日発掘調査の開始式を行う。引き続き、遺構の検出作業を実施。
８月４日　基準点測量開始。
８月９日　遺構掘り下げの実施。
８月11日　調査区の写真撮影を実施。
８月12日　本日発掘調査（現地調査）終了式の実施。
平成17年度中整理作業を実施し、報告書刊行。

第2節　調査の概要

1　調査の方法

本遺跡の調査では、調査区の遺構・遺物の正確な位置を記録でき、なお、将来的に周辺に所在する遺跡の発掘調査での遺構・遺物の調査にも整合できるように、座標軸を基にグリッドを組んだ。近年の調査では世界測地系の座標軸で調査を行うことが通例であるが、隣接した込山C遺跡Ⅱでの発掘調査ではⅧ系国家座標の座標軸を基にグリッドを組んでいることから、今回の発掘調査でもそれを踏襲し、Ⅷ系国家座標の座標軸を基にグリッドを組んだ。グリッドについては、200m×200mの大グリッドを設け区画を行い、その中を40m×40mに25等分した中グリッドを設定（第22図）し、北東端より「A・B・C・・・Y」区とアルファベットの大文字で命名した。本調査区では、L・Q・R区がこの中グリッドに相当する。また、その中グリッドを4m×4mの小グリッドで100区画に分割し、南北列を北から算用数字で「1・2・3・・・10」、東西列を東から五十音順で「あ・い・う・・・こ」と呼称することとした。例えば、その中の北東交点を五十音→数字で表し「あ1」というように命名した。中グリッドのアルファベット→五十音→数字で呼称したグリッド名は例えば「Mあ1グリッド」いうように命名し、この命名されたグリッド名によって遺構に伴わない遺物の取り上げや遺構図の作成の基準とした。また、発掘調査における遺構の実測は、1／20を基準として簡易遣り方実測にて行った。

第22図　込山C遺跡Ⅲ　発掘調査区設定図（1：2500）



第23図　込山C遺跡Ⅲ　遺構配置図（1：300）

3　検出された遺構・遺物

込山C遺跡Ⅱの調査区内において検出された遺構・遺物は下記のとおりである。

遺構）

弥生時代	竪穴住居址	2棟
時期不明	土坑址	7基
	ピット	44基

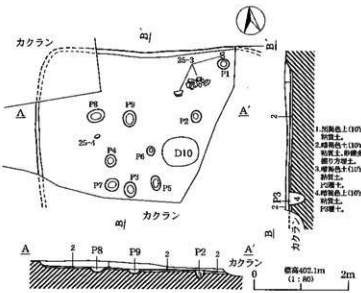
第3節　調査の結果

1　竪穴住居址

1）Y6号住居址

遺構（第24図）

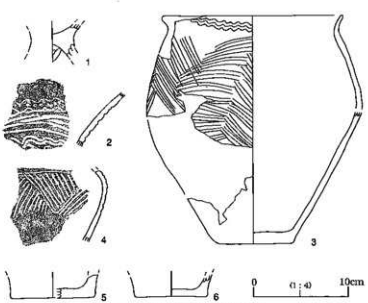
検出位置　Rえ8・9、Rお9グリッド。**重複関係**　調査区域外に伸びるため詳細は不明。**平面形態**　北壁及び西壁の一部のみの検出であるため断定はできないが、方形あるいは長方形を呈するものと思われる。主軸方位は不明である。**壁残高**は攪乱されているところが多いが、17～25cmを測る。**覆土**　黒褐色の粘質土に被覆されていた。**床面の状態**　比較的堅固な状態であった。**炉**　検出されなかったが、調査区域外に存在すると思われる。**ピット**　9基検出され、P1は深さ13cm、P2は深さ16～20cm、P3は深さ30～35cm、P4は20～22cm、P5は深さ9cm、P6は深さ7～9cm、P7は深さ5～7cm、P8は深さ8～12cm、P9は深さ10cmを測る。**遺物の出土状況**　出土土器としては甕・高坏が出土している。



第24図　Y6号住居址実測図

遺物（第25図）

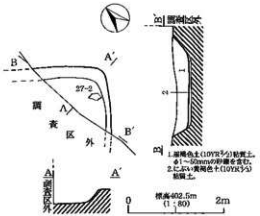
図示できたものは6点で、1は弥生時代の高坏の基部である。2は平行沈線と波状の沈線が施された壺である。3は口縁部下に櫛描き波状文が施され、頸部以下に櫛描斜走文が施される甕である。4は胴部に鋸歯文が施されている。5・6は



第25図　Y6号住居址 出土土器実測図

甕の底部と思われる。

時期　本住居址の所産時期は弥生時代中期～後期としたい。



第26図　Y７号住居址実測図

2）Y７号住居址

遺構（第26図）

検出位置　Rう３・４、Rえ３・４グリッド。**重複関係**　不明。**平面形態**　北壁及び東壁コーナーの一部のみの検出であるため詳細は不明。壁残高は10～14cmを測る。**覆土**　黒褐色の粘質土に被覆されていた。**床面の状態**　軟弱な状態であった。**炉**　検出されなかった。**ピット**　検出されなかった。

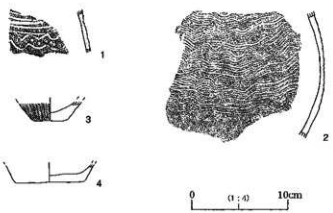
遺物の出土状況　少量出土したのみである。

遺物（第27図）

本住居址の出土遺物で図示できたものは４点である。

１は平行及び波状の沈線が施され、波状の沈線の間に刺突が施される弥生時代の壺である。２は乱雑に櫛描波状文が施される弥生時代の甕である。３は小型の壺の底部である。４は甕の底部である。

時期　本住居址の所産時期は、弥生時代中期～後期としたい。



第27図　Y７号住居址 出土土器実測図

2　土坑址

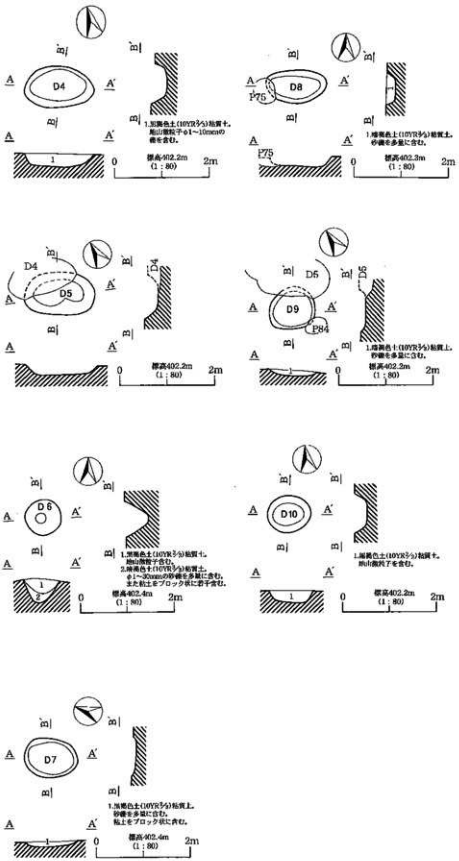
1）Ｄ４号土坑址

遺構（第28図）

検出位置　Rえ７、Rえ８グリッド。**重複関係**　Ｄ５、P86を破壊する。**平面形態**　楕円形を呈する。長軸1.46m、短軸88cmを測り、主軸方位はN―22°―Eを指す。深さは24～30cmを測る。**覆土**　黒褐色の粘質土に被覆されていた。

出土遺物　なし

時期　出土遺物がないので不明である。



第28図　D４～D10号土坑址実測図

2）Ｄ５号土坑址

遺構（第28図）

検出位置　Ｒえ８グリッド。

重複関係　Ｄ４号上坑址に破壊され、Ｄ９号土坑址を破壊する。平面形態　楕円形を呈する。長軸1.5ｍを測り、短軸は1.4ｍを測るものと思われる。主軸方位はＮ—31°—Ｅを指す。深さは18～24cmを測る。

時期　出土遺物がないため不明である。

3）Ｄ６号土坑址

遺構（第28図）

検出位置　Ｑえ９グリッド。

重複関係　なし。 平面形態　円形を呈する。遺構長は78cmを測る。主軸方位はＮ—0°—Ｅを指す。深さは52cmを測る。

覆土　黒褐色及び暗褐色の粘質土に被覆されていた。遺物は弥生時代の甕、壺等が比較的多く出土している。

遺物（第29図）

本土坑址からは多くの出土遺物があった。２点のみ図化した。１と２は共に櫛描波状文の施される甕である。

時期　弥生時代後期と位置付けたい。

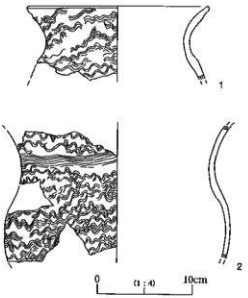
4）Ｄ７号土坑址

遺構（第28図）

検出位置　Ｑえ９、Ｑお９グリッド。 重複関係　Ｐ74を破壊する。 平面形態　楕円

形を呈する。長軸1.1m、短軸84cmを測り、主軸方位はN—10°—Wを指す。深さは8～10cmを測る。 **覆土** 黒褐色の粘質土に被覆されていた。**出土遺物** なし

時期 出土遺物がないので不明である。



第29図 D6号土坑址 出土土器実測図

5）D8号土坑址

遺構（第28図）

検出位置 Qえ8、Qお8グリッド。 **重複関係** P75を破壊する。 **平面形態** 楕円形を呈する。長軸1.24m、短軸は70cmを測る。主軸方位はN—0°—Eを指す。深さは14～18cmを測る。

時期 出土遺物がないため不明である。

6）D9号土坑址

遺構（第28図）

検出位置 Rえ8グリッド。 **重複関係** D5号土坑址、P84に破壊される。 **平面形態** 楕円形を呈する。長軸96cm、短軸92cmを測る。主軸方位はN—26°—Eを指す。深さは10～12cmを測る。 **覆土** 暗褐色の粘質土に被覆されていた。

時期 出土遺物がないため不明である。

7）D10号土坑址

遺構（第28図）

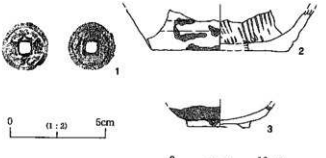
検出位置 Rえ1グリッド。 **重複関係** なし。 **平面形態** 楕円形を呈する。長軸94cm、短軸84cmを測る。主軸方位はN—6°—Eを指す。深さは22～26cmを測る。

3 その他の遺物

ここでは、調査に伴って出土した遺物について触れることとする。

遺物（第30図）

1は銭貨で大盛元宝である。西夏銭で西暦1157年鋳造されたものである。2は擂鉢である。3は陶器で外面に釉が施されている。



第30図 その他の出土遺物

第3表　出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(cm)	残存度	調整		胎土	備考
						外面	内面		
25-1	Y6号住居址	弥生	高坏	– – (3.6)	基部	ナデ	ヘラナデ	5YR6/6 橙色土	
25-2	Y6号住居址	弥生	壺	– – –	頸部	波状文沈線文の中に刺突文		7.5YR5/6 明褐色土	破片実測
25-3	Y6号住居址	弥生	壺	(19.2) 7.4 24.1	口縁部～ 底部2/3	口縁部波状文、胴部羽状文	丁寧なナデ	7.5YR4/3 褐色土	
25-4	Y6号住居址	弥生	壺	– – –	胴部？	胴部櫛描き文、複合鋸歯文		5YR5/4 にぶい赤褐色土	破片実測
25-5	Y6号住居址	弥生	壺	– (9.0) (2.4)	底部1/4	ナデ	ナデ	7.5YR4/4 褐色土	
25-6	Y6号住居址	弥生	壺	– 7.8 (2.3)	底部	ナデ	丁寧なナデ	5YR6/6 橙色土	
27-1	Y7号住居址	弥生	壺	– – –	頸部	波状沈線文の中に刺突文		7.5YR6/6 橙色土	破片実測
27-2	Y7号住居址	弥生	壺	– – –	胴部	波状紋		2.5YR5/4 にぶい赤褐色土	破片実測
27-3	Y7号住居址	弥生	壺	– 3.6 (2.0)	底部	ミガキ、赤色塗彩	ナデ	2.5YR5/6 明赤褐色土	
27-4	Y7号住居址	弥生	壺	– (7.2) (1.8)	底部	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色土	
29-1	D6号土坑址	弥生	壺	(18.9) – (7.6)	口縁部～ 頸部1/3	波状文	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐色土	
29-2	D6号土坑址	弥生	壺	– – (13.8)	頸部～胴部	波状文	摩滅	7.5YR7/6 橙色土	
30-1	—	古銭							
30-2	—	陶器	擂鉢	– (14.4) (3.9)	底部1/4	釉	溝	5YR4/6 赤褐色土	
30-3	—	陶器	椀	– 6.6 (2.2)	底部	施釉、底部回転糸切り			

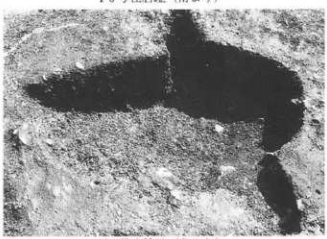
込山C遺跡Ⅲ　完掘写真（南より）

Y6住25-3（1：4）

30-1（1：2）

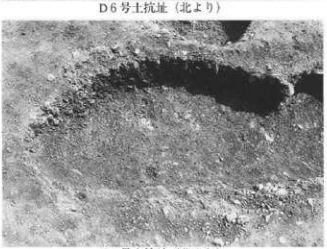
Y6号住居址（南より）

Y7号住居址（南東より）


D4号土抗址（北より）

D6号土抗址（北より）

D7号土抗址（東より）


D8号土抗址（北より）

D9号土抗址（北より）

D10号土抗址（北より）

第Ⅲ章　総　括

込山Ｃ遺跡Ⅱ、込山Ｃ遺跡Ⅲでは調査の結果、弥生時代を主体とする複合集落址であることが、今回の調査の結果判明した。込山遺跡群は、込山廃寺を含む込山Ａ遺跡～込山Ｅ遺跡までの５つの遺跡を総括する遺跡である。

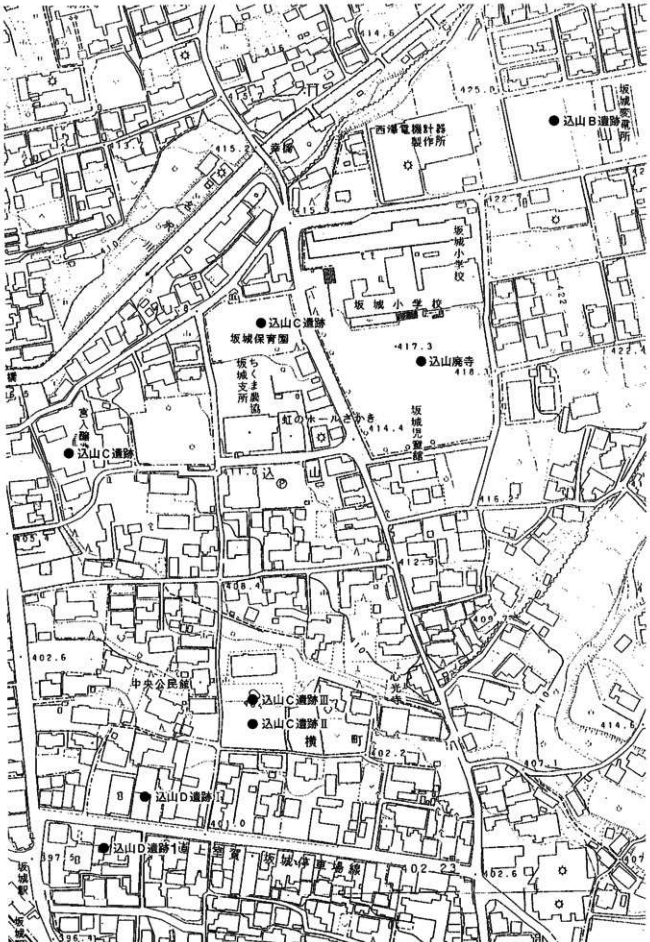
本調査が実施されるまでの状況を見る（第31図参照）と、昭和28年に坂城小学校の校庭拡張に伴って大型の礎石や瓦の出土があり、平安時代の古代寺院である込山廃寺が存在したであろうことが推定され、昭和36年の旧宮入味噌醸造のボイラー室新設工事にともなって発見された込山Ｃ遺跡では縄文時代中期の加曽利Ｅ系・曽利系の土器及び住居址が検出されている。平成11年度実施の町営住宅建設にかかる込山Ｂ遺跡の発掘調査（未報告）では、弥生時代中期末と思われる住居址や平安時代の住居址など数棟が発掘調査された。平成12年度実施の坂城保育園建設にかかる込山Ｃ遺跡の調査（未報告）では早期、前期、中期の土器や縄文前期・中期及び平安時代の数棟の住居址が調査されている。平成15年度実施の溜業インキュベータ施設建設に伴う込山Ｄ遺跡１の試掘調査では縄文時代後晩期の土器や古代の集落が検出されている。平成17年度実施の八十二銀行店舗建設事業に伴う込山Ｄ遺跡（未報告）の調査では弥生時代後期、古墳時代前期、古代の集落の一端が検出されている。以上のように込山遺跡群は、古代寺院が存在している重要な場所ではあるが、縄文時代や弥生時代の集落址及び古代の集落が主体となる遺跡であるということが判明している。

今回の調査では、弥生時代の住居址が検出され、込山Ｃ遺跡Ⅱでは５棟、込山Ｃ遺跡Ⅲでは２棟が検出されている。これらの状況を見ると込山遺跡群の西側の地域には弥生時代の集落址が展開していることが調査の結果明らかになったといえる。

発掘調査では攪乱が多いこと、調査面積が少ないことにより、集落規模や所属年代等がはっきりとしていない状況であるため、詳細については不確実な要素が多かったが、集落の範囲は平成17年度実施の八十二銀行店舗建設事業に伴う込山Ｄ遺跡（未報告）にまで継続すると思われる。

出土遺物では、東海系のパレススタイルの土器が検出されたことより、当地域と東海地方との交流関係が今後の調査に委ねられる結果となったことは大きな成果である。

本遺跡や込山遺跡群の諸遺跡の状況は今後の調査の実施によって明らかにされていくものと思われる。



第31図　周辺遺跡分布図（1：2500）

あとがき

坂城町発掘調査指導者　塩　入　秀　敏

坂城町の北部にそびえ、長野市・上田市との境界をつくる五里ケ峰（1094m）、饒台山（1269m）、鳩ケ峯（1319m）を水源とする何本もの川は、最後には日名沢川となり南西流して扇状地を形成し、千曲川に注いでいる。南～南西面する扇状地は居住地として好適地であり、早くから開発されて多くの遺跡が複合している。近世には北国街道がとおり宿場町を形成し、近代以降はこの南側の段丘下の千曲川氾濫原に信越本線坂城駅がつくられ、町役場もおかれるなど、一帯は坂城町の中心市街地としてあり続けている。

このたび発掘調査された込山C遺跡は広範囲におよぶ込山遺跡群を構成するその一部である。込山遺跡群については本書の「序」・「歴史的環境」に詳しいので贅言を要しないが、込山C遺跡Ⅱ・Ⅲは口名沢川扇状地の扇央部に立地しており、同遺跡群の中でももっとも良い地点を占めている。今回の発掘調査は、Ⅱが坂城町鉄の展示館の、Ⅲが中心市街地コミュニティーセンターの建設に先立って行われたものだが、地点的には隣接しており、込山C遺跡の中では同一部分を成していると考えられる。

発掘調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての集落址の存在が確認され、弥生時代に属する住居址7棟、古墳時代住居址1棟が検出された。そのほかに縄文時代の土器・石器が出土し、時期不明の多くの土坑址・ピットも検出されている。縄文時代の遺物も少なくないがこの時代の集落跡は別の地点である。

もっとも多くの住居址の存在が確認された弥生時代にかぎってみても、中期から後期にかけての所属時期が考えられているようにかなりの時間幅がある。ただ、それが間断なく連続するものなのか、それともその時期の中で断絶するときがあるのか、調査面積も狭かったため、いまのところ確定的なことはいえない状況にある。けれども、込山遺跡群全体の状況をみると、込山C遺跡の中では南部にあたる扇央から扇端にかけて、込山遺跡群の中では西側に広がる部分に弥生時代の中・後期の集落が展開していることは確認できたと思われる。この集落を支えたのは坂城駅や町役場がある千曲川右岸の氾濫原と考えられるが、そこにおける生産・富の集積・周辺の開発がさらに集落を拡大・拡散させ、込山廃寺を建立できるような権力を生み出したと理解できるだろう。、

今回の発掘調査では検出された遺構に伴う各種の遺物が出土しているが、特段刮目しなければならないほどのものは多くない。そのような中で、Ⅱ―P38出土の弥生時代中期に属する甕は、当該時期の資料が少ない当町の弥生時代研究の好個の資料になりうるものと考えられる。また、Ⅱ―Y3号住居址出土のパレススタイルの壺は弥生時代後期前半に属すると考えられるが、東海地方との交流を如実に示す資料であり、さらなる集積が加えられれば、当地方と東海地方との交流についての研究に重要な材料を提供できるものである。調査面積は狭かったものの、その割には良好な資料の出土をみることができたといえよう。

現場作業ではシルバー人材センターより派遣された皆さんに大変お世話になった。また、調査に際して、本書の作成にあたり、多くの機関のご支援、研究者の方々のご指導をいただいた。今回ここに二つの調査地点に関わる発掘調査報告書を上梓できるにあたって、記して感謝の意を表しながらあとがきとしたい。

2006年3月20日

報告書抄録

ふりがな	こみやまいせきぐん　こみやましーいせきに・さん
書名	込山遺跡群　込山C遺跡Ⅱ・Ⅲ
副書名	長野県埴科郡坂城町鉄の展示館・中心市街地コミュニティセンター建設事業に係る緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	坂城町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第27集
編集者名	塩入　秀敏・助川　朋広
編集機関	坂城町教育委員会
所在地	〒389-0602　長野県埴科郡坂城町大字中之条2222　TEL 0268-82-1109
発行年月日	2006年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
込山C遺跡Ⅱ	埴科郡坂城町大字坂城	20521		36°26′42″	138°11′53″	2001年5月25日～2001年6月22日	362㎡	鉄の展示館建設に伴う事前調査
込山C遺跡Ⅲ	埴科郡坂城町大字坂城	20521		36°26′42″	138°11′53″	2004年7月26日～2004年8月12日	288㎡	中心市街地コミュニティセンター建設に伴う事前調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
込山C遺跡Ⅱ	集落址	弥生～古墳	竪穴住居址　6棟 土坑址　3基 ピット　41基	弥生土器、土師	弥生～古墳時代の集落址の調査
込山C遺跡Ⅲ	集落址	弥生	竪穴住居址　2棟 土坑址　7基 ピット　44基	弥生土器、 石器、古銭	弥生時代の集落址の調査

坂城町埋蔵文化財調査報告書

	『開畝製鉄遺跡—第１次調査報告書—』	1977
	『開畝製鉄遺跡—第２次調査報告書—』	1978
	『東裏遺跡』	1983
	『中之条遺跡群　宮上遺跡Ⅱ』（概報）	1993
	『南条遺跡群　塚田遺跡』	1993
第１集	『南条遺跡群　東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』	1994
第２集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1994
第３集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1995
第４集	『南条遺跡群　塚田遺跡Ⅱ』	1995
第５集	『豊鯱堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』	1996
第６集	『中之条遺跡群　寺浦遺跡Ⅱ』	1996
第７集	『中之条遺跡群　上町遺跡Ⅱ』	1996
第８集	『上五明条里水出址』	1996
第９集	『町内遺跡発掘調査報告書1995』	1996
第10集	『坂城町試掘調査・立会い調査報告書』	1996
第11集	『町内遺跡発掘調査報告書1996』	1997
第12集	『戌久保遺跡・町横尾遺跡』	1998
第13集	『込山Ｂほか　発掘調査報告書1997』	1998
第14集	『町内遺跡発掘調査報告書1998』	1999
第15集	『町内遺跡発掘調査報告書1999』	2000
第16集	『開畝遺跡Ⅲ』	2000
第17集	『中之条遺跡群　北川原遺跡Ⅱ』	2001
第18集	『町内遺跡発掘調査報告書2000』	2001
第19集	『中之条遺跡群　宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』	2001
第20集	『金井東遺跡群　保地遺跡Ⅱ』	2002
第21集	『町内遺跡発掘調査報告書2001』	2002
第22集	『町内遺跡発掘調査報告書2002』	2003
第23集	『豊鯱堂遺跡Ⅲ』	2004
第24集	『坂城町町内遺跡発掘調査報告書2003』	2004
第25集	『坂城町内遺跡発掘調査報告書2004』	2005
第26集	『坂城町内遺跡発掘調査報告書2005』	2006
第27集	『込山遺跡群 込山Ｃ遺跡群Ⅱ・Ⅲ』（本書）	2006

発行日　2006年３月30日

編集者　坂城町教育委員会

〒389-0602　長野県埴科郡坂城町大字中之条2222番地

TEL　0268（82）1109

印刷者　信毎書籍印刷株式会社

〒381-0037　長野県長野市西和田１丁目30番３号

TEL　026（243）2105